

うか。その上で幸綱先生だったらどうご覧になるかという眼で見直してみようとしたね。昨日久しぶりに東京歌会に出て、いい時間だなあと思いました。歌が好きなんです、結局。

幸綱先生の十五首選に入った歌は道しるべでした。どうしてこの歌をお取りになったのか。たとえば、東京歌会の新年歌会で二位の歌が三首あって、どれを選ぶかと突き付けられるでしょう。そういう時先生の選歌と同じだということは、無性にうれしものです。ヤッタと思うんです。東京歌会に初めて出たころと全然変わってないなと思う苦笑してしまいます。久松洋一さ



んがまだ学生さんでご一緒していたころ、やっぱり選歌が一致すると、ヤッターなんて（笑）、喜び合って。結局私が頼りにしているのは幸綱先生の基準なんです。

佐佐木由幾先生の短歌教室

大野 短歌を始めたのは由幾先生の朝日カルチャー短歌教室がきっかけですか。

宇都宮 朝日カルチャーの佐佐木由幾短歌教室の一週から三週目までは、短歌の実作を見ていただいた。作り方はこうするのよとか教わるのかと思ったら、お作りあそばせの一言だけで（笑）。作り方をしっかりと教わろうと思っていたのに、お作り遊ばせかあと、ちょっと最初はがっかりした感じだったんです。なんにも知らないで。

四週目になって、由幾先生がこんな歌がありますのよと、前川佐美雄、塚本邦雄、齋藤史、葛原妙子などの現在注目されている歌人の歌を板書してくださったり、原稿用紙にコピーしてくださったりしました。もちろん万葉、古今、新古今の歌も織り交ぜて。私は現代のそういう歌に接して、こんな世界があったのか、今まで私は何をし

ていたんだとたいへん驚いた。それが四十歳くらいです。短歌は自分の感情をダラダラ出すものではないかと友人たちから指摘されたこともあり、ある意味では限界ある文芸として興味が低かったんですが、刺激を受けて急に熱中し出した。夫は文系の人でしたが、短歌にはあまり興味がないのに、編み物などをしているよりも、文学的なものに夢中になることを喜んでくれたので助かりました。

それで東京歌会に出たら、今活躍しておられる佐佐木幸綱という先生に会って、またまたショックを受けました。一種の青春時代が戻ってきたような、自分のために勉強するうれしい時代でもありました。

ただ学生時代に小林士志朗先生の短歌クラブがあって、私は一応入っていたんです。何故かという、終戦後大変な時に先生は短歌クラブの時間に必ずお菓子を持って来てくださった（笑）。私が勝手に作った歌を小林先生がとても励ましてくれて、そういう下地はありました。

由幾先生の短歌教室に入る前に「もうひとつの学校」で大野晋の『源氏物語』を原